

書 評

有 田 潤 著
『ドイツ語学講座第5集』
『入門 ドイツ語冠詞の用法』

原 口 厚

本学部を昨年3月を以て定年退職された有田教授（現名誉教授）によってこの度『ドイツ語学講座第5集』及び『入門 ドイツ語冠詞の用法』が上梓された。『ドイツ語学講座第5集』は1990年に発行された同講座第4集の中で、その「出版は3、4年後になるとおもう」と予告されていたものである。こうした著書の出版は一般に遅れるとしたものである中で、逆に予定を一年以上繰上げて発行を続ける著者の姿勢には脱帽のはかない。そして今後第6集の発行も予定されており、有田文法の全貌が明らかになる日も近いものと思われる。また『入門 ドイツ語冠詞の用法』も第4集の中で発行が予告されていたものであるが、これは著者がこれまでに多数発表を続けてきたドイツ語の冠詞をめぐる論考のいわば集大成とも言うべきものである。そこでまず『ドイツ語学講座第5集』の構成から見てみたい。

- | | |
|-------------------|--------------------|
| まえがき | 64 文法研究と「齟齬」 |
| 系統的一覧 | 65 仮定の würde |
| 59 名詞の種類と冠詞 | 66 テキスト研究B |
| 60 名詞付加と動詞付加 | —独文テキストとしての聖書— |
| 61 kommen と gehen | 67 短縮型間接話法 |
| 62 ドイツ語のA格名詞 | 68 sich ... lassen |
| 63 ドイツ語述語論 | 69 語法の諸形態 |

70 『基礎ドイツ語』と関口文法 73 ラテン語の接続法〔2〕

71 テキスト研究C 雑誌『独文評論』

—Fr. カフカ「変身」— 仏文学会研究発表要旨

72 和文独訳—システムの試み〔2〕 独文要旨(63, 69, 71章)

(59—73の番号は第1集からの通し番号・なお〈59 名詞の種類と冠詞〉は『入門 ドイツ語冠詞の用法』にも〈D 名詞の種類と冠詞〉として収められている)

著者が関口存男氏の文法研究から多くを学ぶと同時に、これを絶えず批判検証し、その発展的継承に大きく貢献してきたことはこれまでの論考が余すところなく示す通りである。〈意味形態〉が関口文法の中心的概念であることは良く知られている反面、〈意味形態〉という語が関口氏によって多義的に使用されていることもあって、その内容を正確に把握することはこれまで一般にきわめて困難であった。こうした中で著者は、〈7. 「意味形態」の成立〉、〈18. 意味形態批判〉の二つの論考において〈意味形態〉をいくつかのタイプに明快に分析整理し、この概念の理解と普及に重要な道筋を切開いたことは特筆されなければならない。そして今回、〈意味形態〉の延長線上に位置する〈意味形態文法〉を考える上で重要な手掛りとなるのが、〈64 文法研究と「齟齬」〉である。同章によれば、著者は話し手の『「こういう意味を表現したいという要求」』は個別言語の垣根を超えて共通して存在するとし、「意味形態論の基礎をなすのはこの表現要求の共通性である」(下線原著者、以下同じ)とする。即ち与えられた文法形式からその用法を求めるという従来の方角とは逆に、『「いおうとする趣旨」』である表現要求を出発点として、これに対応する諸表現形式を求めて行くのが意味形態文法であるとするのである。そしてこのような意味形態文法の優れた実践例として挙げられるのが第4集から連載を行っている〈72 和文独訳—システムの試み〔2〕〉であり、〈69 話法の諸形態〉並びにその中の一形式を独立して扱った〈67 短縮型間接話法〉である。

〈和文独訳—システムの試み〉は著者によれば、『独作文教程』の復活(第4集236頁)を狙いとしている。周知のように『独作文教程』は戦前に出版された500頁を超える大著であり、その例文が古風かつ難解であるのみならず、執筆の趣旨もあって誰でもが手軽に利用できるといった性格のものではない。こうした中で著者は『独作文教程』に範をとり、本書では「因由と結果」、「相反と認容」という二つの意味類型(著者の言う第2意味形態)に基き、これを表す多岐にわたると同時に精選された種々の表現形式

を挙げ、これにわかりやすくて的確な解説と用例を付すことによって「その精神を生かし再生を試みる」(第4集236頁)ことに見事に成功している。そしてこれが『独作文教程』の単なる要約、焼直しといったものではなく、同書の一部に付け加えられるべき労作であることは関口氏の次のことばからも理解されよう。「作文教程という書名は非常に実用的ですが、内容は必ずしも実用的というのではなく、むしろ誰か有為な人に實用化して頂きたいと思う色々な問題を提供した書物といった方が妥当かも知れません」(『独作文教程』復刊の辭)。

〈69 話法の諸形態〉において著者は、まず直接引用における引用符について考察を行い、「直接引用の根本はその『隔離性』『絶縁性』にあり」、「引用の符号それ自体は必ずしも不可欠の要素ではな^く」、「隔離性は引用符という符号から生ずるのではなくて、符号はそれを“明示する”補助手段にすぎない」と述べている。このことは、とかく我々がその文字面に目を奪われがちなテキストの背後に広がる意味形態の世界を読み解くということが一体どのようなことであるかの一端を垣間見せるものとしてきわめて興味深い。著者はこれに引続いて、「間接話法とは、作者以外の人物(まれに以前の作者自身、13章参照)の立言を“趣・旨・由”として伝達する考え方(意味類型)であり、その表現形式である」との概念規定のもとに、間接話法を表す諸形式についての分析を行っている。そしてそこで取上げられている表現形式の幅広さには目を瞠るものがあり、各種の表現形式を内容面から横断的に捉えることを可能にする意味形態文法の面目躍如たるものがある。一例を挙げるならば、「Viele nehmen Bürgertum und moderne Gesellschaft für gleichbedeutend. Sie betrachten den Bürgerstand als die Regel, die anderen Stände nur noch als Ausnahmen, als Trümmer der alten Gesellschaft, ...」における前置的接続詞 als, für もまた「Viele glauben, daß Bürgertum und moderne Gesellschaft gleichbedeutend seien.」を表す「正規の間接話法文の一種の縮約形」として取上げられているのである。

意味形態文法によって得られるものは大きい。その最大のものとしては、『日本語による日本語の考え方の整理』を必然的に伴うことによって、母語である日本語の中では必ずしも意識されていない論理関係が明確に意識化されるという点が挙げられよう。こうした点から著者は、「けっきょく意味形態文法とは文を作るための文法と同じことを別の言葉でいいあらわしたものにすぎない」とするのである。しかし著者も指摘する

ように、意味形態文法に内在する問題点の一つに「齟齬」が挙げられる。〈齟齬〉とは関口氏の『接統法の詳細』の33頁に現れることばである。関口氏の本来の考え方では、外国語の研究、教育はまず意味形態（著者によれば意味類型）から出発して、それを表すためにはどのような文法形式が使用されるかという方向に向わなければならない。即ち『用法から出発してその形式を研究』しなければならないのである。それにもかかわらず「接統法をテーマとして何かを云わんとする以上は、結局は形から發して意味（評者註、著者によれば意味類型）を求めることになる」わけであり、これは「齟齬だ」。此の齟齬は只今のところ其の實用價值以外、他の何者に依っても辯護さるべき餘地がない」ということになるのである。この点に対する著者の見解は明快であり、関口文法の基本的性格をまさに喝破する次のことばは、関口氏の文法研究に対する深い敬愛の念に基けばこそ、これに絶えず批判を加えることによってその發展に努力してきた著者にしてみればじめて可能であるといえよう。「関口文法には理論的にみて一種の破綻があるとおもう。しかしそれは實用語学の宿命であって、その価値をいささかも損なうものではない。語を強めて言えば『齟齬』こそ関口文法の基本的性格であり、外国語学習の必然であるとおもう」。そしてこうした立場から著者は、「外国語を目標とする以上……意味形態から出発するといっても、けっきょくは表現要求と表現形式との間の往復運動になるであろう。だから齟齬は、不可避的な、外国語研究の宿命である」としている。この見解に対して評者も異論はない。ただ「齟齬」という問題に関しては、単に形式文法と意味形態文法の間関係にとどまらず、広くドイツ語教育全体のあり方の中で再確認しておくことも無駄ではないと思われる。

今日、大学のドイツ語教育に対する批判に際して決って槍玉に上がるのが文法の重視である。しかし本当にドイツ語運用能力向上の足を引っ張っているのは文法であろうか。評者は、問題にすべきは文法それ自体ではなく、授業における文法の自己目的化という現象であり、このことは形式文法のみならず、意味形態文法も避けて通ることのできない問題であると考え。即ち、意味形態文法、そして意味類型に対応する文を作ることそれ自体が学習のための学習として教室の中で自転を続け自己目的化する時、意味形態文法はドイツ語教育におけるその本来の意義を失うのではないだろうか。そこで常に問い続けなければならないのは何のための意味形態文法であり、独作文なのかということであろう。確かに著者の言うように、意味形態文法は各種の表現形式に対する一種

鳥瞰的な総体的把握を可能にする。しかし人間のコミュニケーション活動は言語のみによって行われているわけではなく、非言語的手段もきわめて重要な役割を果たしている。また言語的コミュニケーションも単にその形態的、統語的、意味的〈正しさ〉のみによって保証されているわけではなく、それぞれの状況の中で言語をいかに運用するかという面も無視することができない。したがって、各種表現形式間の微妙な差異を問題とし、ある表現要求を実現する文法的に〈正しい〉表現形式を文レベルであくまでも追求するという方向性は必ずしも絶対ではなく、これとは逆に、限られた言語的知識、手段、あるいは非言語的手段から出発して、これをフルに活用することによって意志疎通の道を何とか切開いて行くような指向も外国語としてのドイツ語教育の中では不可欠の要素であると評者は考える。したがって意味形態文法、そしてそれに基いて文を作るということは必ずしもドイツ語教育の最終的目標ではなく、人と人、人とテキストの間のコミュニケーションをいかに成立させ、より適切なものにして行くかという総合的戦略全体の中でこれを構成する一つの戦術として一きわめて重要な戦術であることは言うまでもないが一相対的に位置付ける必要があるのではないだろうか。しかしまた、こうした広く人間のコミュニケーションの在り方を念頭に置いたドイツ語教育においても、それぞれの具体的場面において、意味形態文法に基いた形で何らかのトレーニングを行うことが必要となりうるという意味では、ここでも「齟齬」は不可避であると言えよう。したがって、著者は「関口氏の功績はこの齟齬を明確に意識し、齟齬として明示した点にある」としているが、「齟齬」は単に形式文法と意味形態文法の間に限定される問題ではなく、このように人間のコミュニケーションの在り方と意味形態文法の間にも存在するという意味でも常に外国語教育の必然なのであり、また逆にこのことを認識することによって、ドイツ語教育における意味形態文法の役割にも更に新たな可能性が広がるのではないだろうか。

『ドイツ語学講座』もさることながら、関口氏の文法研究、とりわけ『冠詞』に対する深い理解を有する著者ならではの業績といえるのが『入門 ドイツ語冠詞の用法』である。冠詞は日本人がドイツ語を学習、運用する上で最大の難関でありながら、評者の知る限り、冠詞についての日本語による体系だった著作は関口氏の『冠詞』以来出版されていない。しかし『冠詞』は二千頁をこえる膨大かつ難解な研究書であり、ドイツ語の学習、運用に際しての適切な参考書とは言い難い。また現在多数出版されている教科書、

文法書等の冠詞解説も実用上の必要を満たすにははるかに遠いのが実情である。こうした中で、「少なくとも初級2年程度を終えた人びとを念頭において」、「初級の作文に必要な最小限度の項目は含まれているはず」との方針の下に、ドイツ語冠詞の用法を144頁にわたって簡潔かつ体系的に記述した本書に寄せられる期待は大きい。本書の構成は次の通りである。

本書の目的と読み方

A冠詞理解の基本

B冠詞各論

第Ⅰ部 積極的無冠詞形

第Ⅱ部 不定・冠詞

第Ⅲ部 機能的定冠詞

第Ⅳ部 形式的定冠詞

第Ⅴ部 消極的無冠詞形

C比較のために

D名詞の種類と冠詞

あとがき

冠詞の解説は一般に定冠詞に始まり無冠詞に終ることが多く、その順序について論じられることはほぼ皆無である。関口氏の『冠詞』も第一巻が定冠詞篇、第二巻が不定冠詞篇、第三巻が無冠詞篇という構成をとっている。これに対して著者は冠詞解説の順序それ自体を問題として取上げ、次のように述べている。「わが国の諸学者が定冠詞からはじめるのは、有冠詞言語の使用する各国の文法学者に倣ったものとおもわれる。しかし、冠詞使用が自然な語感として身についた人たちの認識と説明が、そのままわれわれにも最適だとはかぎるまい。日本語、中国語、ロシア語を母語とする国民がたとえばドイツ語を学ぶ場合には、ドイツ人学者の論じ方とは異なる行き方であってもいいのではなかろうか」。その結果として著者は無冠詞形を二分し、その一つである積極的無冠詞形から解説を始めているのであるが、この点は類書の中でもひととき異彩を放っている。しかしこれは単なる思いつきによるものではなく、著者の長年にわたる言語についての洞察と類稀な言語感覚がまさにこの点に結実していると言えるのである。

冠詞はドイツ人の目から見ればあるのが当然であり、無冠詞形はある種の負の現象に

見えるものと思われる。無冠詞形を冠詞の省略と考え、冠詞解説の最後に扱うケースが多いのはこうした発想によるものではないだろうか。一方、冠詞という異物に苦しむ日本人の注意はいやでも定冠詞と不定冠詞に向い、無冠詞形は日本語の『『即自的』無冠詞形』と同一視さえされ、無冠詞形に対する日本人の関心もやはり消極的なものとなる。これに対して著者の言語をめぐる論考の根底にある認識は「対立は言語の本質である」ということばに集約されており、各冠詞形についてもこれを徹底して他の冠詞形との相互関係の中で考察を試みる。そして、「ドイツ語にもし定冠詞・不定冠詞がなければ、日本語と同様に『無冠詞形』も存在しない」との指摘のもとに、他の冠詞形に対する無冠詞形の果している示差的機能に着目するのである。ともすれば我々が自明性の色眼鏡のもとに見落しがちなこうした事象についての著者の鋭敏な問題意識は、単に理論的認識から引出されたものではなく、その豊かな言語感覚の存在を前提とするものであることは言うまでもないであろう。こうした優れた言語感覚に基いてはじめて言語学的認識は、本書に見られるように言語記述の有効な道具として機能するのである。また著者が無冠詞言語を母語とする者の目から見た冠詞論を主張する時、それはただ単に日本語の側からドイツ語を見てこれを記述するといった類のものではない。その背後にあるのは、日本語、ドイツ語双方の徹底した相対視を通じて、あくまでも言語そのものを見据える目であり、またこれを前提としてはじめてドイツ人、日本人双方にとっていわば二重の盲点となっている無冠詞形の積極的機能を著者が見定め得たことが理解されるのである。

日本人にとって冠詞が大きな困難となるのは、冠詞は名詞の『『意味』と違ひ、その時々¹の指示関係²」を言語化するものであり、我々はこれを日本語の中で通常は意識することなく通りすぎているからである。したがってこの点についての意識化がまずなされない限り、詳細にわたる冠詞の運用規則をいくら羅列してもいたずらに混乱を招くばかりであろう。こうした中で、著者の次のような指摘は日本人が冠詞について考える上で問題の根本的所在に光を当てるものであると言えよう。「無冠詞言語一たとえば日本語、ロシア語一が存在することだけでもすでに明らかなように、冠詞は1種の過剰形式であり、名詞に対する規定関係（関口氏『冠詞』I、S.14以下）を語（Wort）のかたちにして暗示するものである」。そして著者の冠詞論の基盤をなすのは「冠詞は名詞あつての冠詞であり、冠詞用法の問題とは、名詞を用いるさいに、立言者の脳裏にどうい

え方が働くか、という問題にほかならない。冠詞問題とは名詞の問題である」という考え方である。即ち、「冠詞の種類や用法は、その後ろにある名詞がどんなふうに用いられるかできまる」のであり、「冠詞が名詞の意味を限定したりするのではなく、名詞のそのつどの用い方に応じて冠詞が取捨・選択される」とするのである。そこで著者はこうした観点から、「名詞の有する名詞性(名詞らしさ、いかにも名詞であるという感じ)」を五段階に分け、これに対応する冠詞形を次のように表している。

名詞の種類	名詞性	冠詞
I. 語として掲げられた名詞	* * * * *	⇒ 積極的無冠詞形
II. 「どの～」という規定を欠く名詞	* * * *	⇒ 不定・冠詞
III. 個体または概念を指示する名詞	* * *	⇒ 機能的定冠詞
IV. 指示関係の実質を失った名詞	* *	⇒ 形式的定冠詞
V. 名詞性をほとんど失った名詞	*	⇒ 消極的無冠詞形

著者によれば、名詞性とは「名詞が語としてどのくらい際立っているか」ということであり、その度合いが最も高いのは「Feuer!」, 「das Wort Hand」のように「語そのものに注目を集めるべく冠詞を用いず、名詞をそのまま『むき出し』にしておく」ケースである。これは名詞が語として掲げられた場合であり、「けっして熟語の構成要素にならない」という特徴を持ち、著者はこれを「積極的無冠詞形」と命名している。中でも積極的無冠詞形の性格をはっきりと浮び上がらせるのが著者が「情緒型の無冠詞形」と命名するタイプである。著者は「Mitleid ist Sünde.」, 「Arbeit ist des Bürgers Zierde.」といった無冠詞形について、「このタイプの無冠詞形は簡潔・強力・鋭利な口調であって、よくも悪くも情緒的文勢を感じさせ、これに対して das Mitleid, die Arbeit 等の定冠詞づきの名詞はこれより鷹揚・合理的・穏健といった語感で受け取れる」と述べている。こうした他の冠詞形との対比に基いてその語感にまで立入る説明は、冠詞形の選択を立言者の主観の反映という要素を抜きにして、文法規則上の正誤の問題としてのみ考えがちな日本人学習者に対する良き解毒剤となるであろう。一方これとは対照的に、「an Hand ～^G」という表現の場合、「anhand～^G」とも書かれることから分るように、Hand は独立した名詞としての機能をほとんど失っているといえる。このように「大文字使用と分かち書きによってわずかに名詞らしさを保っているだけ」の無冠詞形を著者は、冠詞用法の角度から「消極的無冠詞形」とし、「必ず熟語にのみ現わ

れる」とする。こうした無冠詞形の截然とした二大別については異論もあることと思われる。しかし外国語の研究と教育はその視点を大きく異にする営為であり、詳細にわたる外国語研究の成果をそのまま学習者に提示することが外国語教育にとって有益な方法であるとは言えない。外国語教育の鉄則は、細部の問題は後回しとして、学習対象の全体像を学習者にまず概観させ、印象づけることであり、積極的無冠詞形と消極的無冠詞形をこのように対比的に取扱うことは教授法上当を得た措置であるといえよう。

著者はこうした二分法を更に定冠詞についても適用し、消極的無冠詞形に準じて、「定冠詞がその本来の機能を失ってしかも消滅せず、せいぜい格を示す機能（示格機能）をもつにすぎないとき」これを「形式的定冠詞」とする。この型の名詞が出現するのは、「zur Schule gehen.」, 「im Vergleich mit」といった主に熟語の場合であり、学習者はその中に含まれる定冠詞をやはりそのまま受入れざるを得ないことを考えるならば、この措置によって得られるものも大きい。これに対して「名詞が一冠詞が、ではない」とにかくなんらかの点で、むしろ不定冠詞の場合とは違った意味で、限定的に用いられていることを示そうとするとき」に使用される定冠詞を著者は「機能的定冠詞」と命名する。即ち、機能的定冠詞は形式的定冠詞に対して、定冠詞がその本来の機能を發揮している場合であり、著者はこれを更に二分する。その一つに挙げられるのが「個体指示」という用法であり、これは「Der Hund ist gestorben.」のように、名詞がある特定の個体を指して使用される場合である。もう一つの用法は「概念指示」と呼ばれるものであり、「Der Hund ist ein Säugetier.」のように名詞がある概念を指して用いられている場合がこれに該当する。

次に不定冠詞 ein について著者は、そこに含まれる〈不定〉という概念一日本語で表すならば「或る」一に着目する。そして「Ich möchte einen Kugelschreiber, Hefte und Klebstoff.」という文の Kugelschreiber（有数名詞の単数形）、Hefte（単数であれば ein がつく有数名詞の複数形）、Klebstoff（有量名詞）の三者の共通項として「“どの〜か” という指示規定がない」という点を挙げ、これに型名詞（ein Treffen 等）を加えた四者を「不定・冠詞」という一つのカテゴリーとして扱う。即ち、「ein Kugelschreiber の不定冠詞 ein は、むしろ『どのボールペンであるか』いえない、あるいはいわないで、その明示を避けるための冠詞だとしてもいいほどである」とするのである。著者はこのように不定・冠詞の解説にあたって、有数名詞を下位概念とする可算

名詞、及び有量名詞と事型名詞の二者を下位概念とする不可算名詞という考え方を使用する。そしてその際に、「可算・不可算の区別は名詞のそのつどの『考え方、用い方』であって、名詞にはじめから付着した性質ではな」として「対象物の側からみでの分類」である物質名詞との峻別を主張する。この点は物理的世界像とはそのあり方を異にし、様々な視点から世界の分節化を行う言語というものについて考える上で重要である。そこで〈物質名詞は無冠詞とする〉といった規則をただ挙げるのではなく、言語をめぐるこうした仕組自体に読者の目を向けさせる次のような形での説明は、冠詞の単なる受容にとどまらず、更にその創造的運用にも道を開く上できわめて有益であると言えよう。「不定量—不定数ではなく—の視点から用いられた名詞を有量名詞と呼ぶ。Ich trinke Wein. の Wein がそれである。有量名詞というのは名詞に付着した特質ではなく、1つの観点、視点を指すものであるから、同じ語が、ein Wein にも Weine にもなる。そこが対象物そのものに即した概念である『物質名詞』と違うところである。ein Wein は『ワイン1つ』（注文のさいに）、『或る種の（よい、ひどい）ワイン』、Weine は『数種のワイン』（リストなどで）を意味する。つまりそのつどの言語上の関連でどれかが選ばれる」。

本書を通読してわかるのは、関口氏の冠詞研究の成果に対する著者の周到な目配りである。このことは〈不定冠詞 ein の4つの含み〉、〈個体指示〉、〈直接規定と間接規定〉といった用語にもうかがわれよう。そしてまたその一方で、本書がこうした確かな基盤の上に打立てられた斬新な冠詞論であることは、〈名詞性に基いた冠詞形の五分類〉、〈不定・冠詞〉といった随所に見られる著者独自の洞察が雄弁に物語っている通りである。中でも本書が類書に対して鮮かな対比をなすのは〈無冠詞言語を母語とする者のための冠詞解説〉という一貫した姿勢であり、これが本書の持つ大きな説得力の源泉となっている。そして本書はこうした立場から、単に冠詞についてのマニュアル的な閉じた知識を媒介するのではなく、冠詞をめぐる様々な言語上の〈考え方〉を説き明してゆくことによって、読者自身によるドイツ語の能動的運用に道を開く、本来の意味での良質の〈参考〉書となっているのである。

最後に学習者として一つ気付いた点を述べさせていただきたい。それは「A冠詞理解の基本」、「B冠詞各論」及び「D名詞の種類と冠詞」のいずれもが理論的解説の色彩が強く、内容的にやや重複するのではないかという点である。そこで各章の役割分担を鮮

明にするためにも、「B冠詞各論」の中で実例としての独文テキストをいま少し増やしてはいかがであらうか。「B冠詞各論」の中で現在使用されている H. M. Enzensberger, M. L. Kaschnitz 等のテキストは、これまでの『ドイツ語学講座』でテーマ的を射た独文テキストを達意の日本語訳と共に数多く提示してきた著者のことであり、そこで扱われている問題の提示と理解にとって説得力に富むと同時にきわめて印象的である。言語の学習にとっては理論的認識と同時に体験に基く実感が何よりも必要である。著者が「本書の目的と読み方」の中で「A冠詞理解の基本」と「B冠詞各論」を何度か読んでから理論編として用意されている〈D名詞の種類と冠詞〉を読むように指示しているのも、まず冠詞の実際を見てから理論に進むという帰納的理解を読者に望んでいるものと思われる。そこで「B冠詞各論」において、問題を浮彫りにする独文テキストを通じて読者が冠詞運用の実例を数多く体験する機会を設けることは、著者の理論的解説を読者に納得させ、語感を獲得させる上で更に有効に作用するのではないだろうか。

本書は冠詞についての実用の書として、今後我々の座右の書となろう。そしてその一方で本書はいわゆる語学参考書には見られない独自の深みと広がり刺激を全体にたたえている。これは本書が実用書としての体裁の中で、その実は言語という現象についての著者の洞察そのものであることによるものであり、ここに研究と実用の関係の一つの理想の姿を見るのは評者のみではあるまい。